



語り継ぎたい戦争体験

白鳥秀樹

今年は例年になく真夏日が続き暑い夏だった。六五年前も暑い夏だったと聞く。第二次世界大戦が終結して六五年の歳月が過ぎ、戦争体験者が着実に少なくなっている。

私は戦後生まれなので、まったく実体験はないが、母からよく聞かされた。終戦時には両親と姉五人は「樺太」の留多加郡で生活し、家業は部落で一軒しかない雑貨店を営んでいた。

終戦直前にソビエト軍が南樺太に侵攻し、あつという間に占領され、さらに北海道を占領しようと、どんどん部隊が「大泊」に集結したという。その後、北海道の占領は諦めたものの、多

くの日本人居住者等は、それから三年あまり抑留され、軍関係者などはシベリアに送られていったのだ。

ソビエト軍が入ってきた当初は、武器狩と称して金目の物を物色しに、我が家の店や住宅を土足で搜索をされることがたびたびあった。当時、父は、護身用にと日本刀を隠し持っていたが、踏み込まれた時、母の瞬間の機転で、立て掛けていた畳の間に隠し、見つからなかったという。もし、見つかったらシベリア送りだっただろうなと思しじみ父が言っていた言葉が今も思い出される。

父は部落で消防団長の役を担ってい

たこともあり、引き揚げる人たちの面倒をみたり、ロシア語を覚えてソビエト軍との交渉に当たるなど、家族共々最後まで残留して引き揚げてきたと、口数の少なかった父だが、少し誇らしげに語っていた。そんな経験からか、父は、私が子どもの頃は、よくロシア語を話し、その意味を教えてくれたものだ。

引き揚げる直前、「真岡」の収容所で私のすぐ上の兄が生まれた。私は十人兄弟の九番目だが、幼少の兄二人が樺太で亡くなり、引き揚げ船には両親と子ども六人が乗船し、ふるさと北海道に帰ってきた。

やんちゃ坊主だった、すぐ上の兄は、よく母に叱られ、冗談半分だが、母は口癖のように「引き揚げ船から海に捨ててくればよかった」と言っていた。樺太からの引き揚げ船で、母は見たのだ。身を切る思いでわが子を海に捨て、悲しみに沈む女性の姿を。本土に帰っても食糧不足などで育てることはできないという思いからだろうが、母は「授かった命だから何としても育てた



い」という思いでいっぱいだったという。すでに二人の子を亡くしていたからだろうと思う。しかし、やんちゃな兄も十二歳の時に川で溺れてこの世を去ってしまい、そのときの両親の悲しみは、いかばかりか計り知れないものがある。

父は三八歳（一九四三年）の時に心臓弁膜症と医者に診断され、治すことができないと医者に見放されたという。力仕事ができない身体になったのだ。父ができない仕事を母が代わって行っていた。馬車や馬そりで丸二日かけて商品の仕入れに行ったり、力仕事を一手に引き受けていたのだ。母は相当勝

ち気な性格だったから頑張ったのだと思う。長女を「豊原」の女学校に通わせ、長男は中学校に行かせていたというし、人の良い父の性格もあり、いつも三〜四人の居候がいたそうだ。そんなことから当時としては裕福な家庭の方だったのではないだろうか。しかし、ソビエト軍が侵攻してから樺太での生活が大きく変わり、北海道に引き揚げてきてからも悪戦苦闘だったという。

開拓団を組織して国からの土地の払い下げを受けることになり、江別の野幌原野と神恵内村の当丸峠に向かう傾斜地を提示され、神恵内村を選択した。入植してまず、弥生時代のような細い丸太と笹で、拝み小屋を建て、そこで寝起きをするという生活が二年続いたそうだ。しかし、あまり良い土地ではなかったため、収益が上がらず、子どもが多かったことから、この地を諦めて転居し、私が生まれた幌加内町朱丸峠を自転車で走ったが、当時の開拓地の跡には、家は一軒もなく、笹藪と雑木林になっていた。余談だが江別に

入植していたら、今頃土地成金だったのだろうと思う。当時の野幌原野は現在、住宅地のご真ん中になっているからだ。

朱鞠内での生活も、私が小学四年生までは、電気も無く、小川の水を汲んで飲むという生活だったし、ドラム缶を半切りした野天風呂で、よく母と二人で入ったことを思い出す。生活は厳しかったのだと思うが、私の記憶には楽しかった思い出しか残っていない。

つい先日、NHKの朝ドラで漫画家の「水木しげる」さんの生々しい戦争体験が放映されていた。薄れていく戦争体験が多くの人たちに伝わることは大変良いことだと思う。私も、両親や兄弟の拙い戦争にまつわる体験だが、これからも語り継いでいこうと思う。

悲惨だった沖繩戦を六五年経って語り始めた『沖繩のおばあ』の「戦争は人間が人間でなくなるわけよ…」という言葉が重く私の心に残る。

へしらとり ひでき・旭川市議会議員